

教職科目「特別活動指導法」における実践的指導力を学生に育成するための取組：「主体的・対話的で深い学び」を視野に入れて

著者	根岸 久明
雑誌名	洗足学園音楽大学教職課程年報
号	1
ページ	111-125
発行年	2018-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1493/00000741/



教職科目「特別活動指導法」における実践的指導力を 学生に育成するための取組

—「主体的・対話的で深い学び」を視野に入れて—

根 岸 久 明

Hisaaki Negishi

はじめに

特別活動は、総合的な学習の時間と同様に教科外教育として区分されているが、筆者は学校生活を充実させるとともに活性化させるためのとても重要なものであると考えている。しかし、特別活動は授業時数も学級活動が年間35時間以上と明確に示されているが、他の生徒会活動、学校行事は明確に示されていない。このことから次期学習指導要領で小学校に教科として導入される外国語教育をこの時間を活用することも可能といわれている。このことからしても特別活動は重要といわれながら、むしろ教科教育重視、特別活動軽視と映ってしまう面もある。そこでこの現状を踏まえつつ、特別活動の教育的な意義や役割を改めて明確にするとともに、筆者が担当する教職科目「特別活動指導法」を通して、教員志望の学生に実践的指導力を如何にして育成するのかを記したものである。

実践的指導力の養成を目指した研究は、例えば、可能な限り「特別活動」の授業の中で実践的・演習的内容を取り入れ、そのことでどのように学生が現場意識を抱きながら学習を進めることができたのかの森田(2009)の実践研究⁽¹⁾がある。そこで、この研究内容も意識しつつ、筆者が担当する「特別活動指導法(中等)」における実践的な取組について紹介し、その成果と課題を考察していくこととする。

1 「主体的・対話的で深い学び」と特別活動について

いま教育界ではアクティブ・ラーニングを意識した授業が求められている。ここにきてアクティブ・ラーニングのことをALと略して記載する本も増えてきている。

そもそもこの言葉は、大学の授業について平成24年8月28日の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて」において新たに生まれてきたもので「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見しそ

の解決を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である⁽²⁾」と指摘し、従来のいわゆる「知識の詰め込み型」中心の授業から、「学生主体型」の授業に換えていくことが重要であることを示している。

またこのことを受けて、初等教育においても一人ひとりの子どもが受け身とならない能動的な授業へ大きく授業改善することが求められた。ただ、アクティブというと座学でなく体験活動や話し合い活動をすればよいと誤解されることを心配して、アクティブ・ラーニングという文言から「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）と平成28年の文部科学省「教育課程部会」において再定義された。

この「主体的・対話的な深い学び」を実現するためには、学習過程を質的に高めていくことが求められていて、平成28年12月21日の中央教育審議会答申で次のように記されている。

- ① 学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付けた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

子供たちが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱（生きて働く「知識・技能」の習得・未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成・「学びに向かう力・人間性等」の涵養）を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。教員はの中で、教える面と、子供たちに思考・判断・表現させる場面に効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。

*アンダーラインの部分は筆者が付け足したものである。

ここでは次期学習指導要領で示されている資質・能力の三つの柱を育成するためには、「主体的で対話的な深い学び」の実現が必要であり、そのためにアクティブ・ラーニングの視点による授業の新機軸が必要とされているということである。

そこで、ここでは特別活動とアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の関係性について記してみたい。まず、佐藤（2010）らの研究⁽³⁾である、「学生が主体となる授業方法として、「体験」や「参加」（ゼミナール、ワークショップ、チートリアル）を取り入れた授業方法」を挙げることができる。この授業方法の研究では、メリットとして3つ述べている。①「体験」や「参加」によって、学生が主体的に考えるきっかけを作ることができる。②「少人数」のグループ活動によって、能動的な参加の機会を持たせることができる。③「グループ内・グループ間」で競争を促すことで、積極性を引き出すことができる。なお講義中心の授業においても、双方向性を持たせたり、適切な宿題を課したりすることで、学生を主体とする時間を作ることが可能であると記している。

伊崎（2015）はアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）について、『「教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等」といった学習活動を行うことは目的でなく、「思考の活性化」に目的がある。実際にやってみて考える、意見を出し合って考える、分かりやすく情報をまとめ直すなどの多様な活動を通して「より深く分かる」ことや「よりうまくやれるようになる」ことを目指す。そのための学習活動の活性化、アクティブ化である』と述べている。そしてその質は「言語活動の充実」と連動していることを挙げている。

また特別活動は、望ましい集団活動を通して「なすことにより学ぶ」を指導原理とし、その上で、学級集団の育成上の課題や発達の課題及び道德教育（道德科）の道德内容などを強く意識して、その課題解決に向けて自主的、実践的な態度（自己指導力）を育て、具体的に実践することを目指している。ただ最終的に目指しているのは、よりよい集団、社会、国家をつくりあげることが目標としている。⁽⁵⁾

このことから、いわゆる座学とは異なり「なすことによって学ぶ」という特質をもつ特別活動とアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）は相互に密接な関係があると指摘できる。

そこで、これらのことを踏まえた上で、受講している学生の授業力の向上を目指して「主体的・対話的・深い学び」（アクティブ・ラーニング）を視野に入れた筆者の授業実践をについて紹介する。

2 ユニークなアイスブレイクの導入

本科目「特別活動指導法」は、「理論と実践 現場で即生かすことができる指導力を学ぶ特別活動」を目指し、生徒と教師相互の視点から考えさせることに留意して授業を展開することにしている。

授業の導入分ではリラックスと集中をつくるために極力「アイスブレイク」として、中学校現場で活用できるさまざまなワークを学生に体験させている。例えば、「両どなり他己紹介&自己紹介」というワークは、学生が両どなりだけ覚えればいいので、あまり抵抗なくできるので有効である。具体的に進め方を次に紹介する。[この内容は青木⁽⁶⁾のアイスブレイク（ほんの森出版社）を参考としている]

①輪になって座る。

②「両どなりの人と、「名前」と「好きな食べ物」の情報交換をする。

たとえば、「イカが好きな洗足学です」「カレーが好きな○○です」などと自己紹介をし合いましょう」と促す。

- ③「それでは、両どりの人の紹介をしながら、順番に全体で他己紹介と自己紹介をしていきます。たとえば、「カレーが好きな○○さんと、ケーキが好きな□□さんの間に座っている、イカが好きな洗足学です」と他己紹介と自己紹介しましたら、

となりの人は、「イカが好きな洗足さんと、ハンバーガーが好きな△△さんの間に座っている、ケーキの好きな□□です」と時計回りに他己紹介と自己紹介をしていきます」とやり方を説明し、スタートする。

この実践は第1回目の授業において行ったが、多くの学生が緊張を和らげその後、緊張感の中にもリラックスして講義を受けていたように感じた。また、筆者の中学校教員時代の経験から、学級懇談会において「よく行く近所のお店」というテーマで実施すると大いに盛り上がり、その後の会もいい感じで進めることができること間違いなしである。

これ以外にも、「1分をあてよう」「記者会見タイム」「漢字発見ゲーム」「20 答法」「イングリッシュ」というワークを取り入れて実施した。これらのワークは、いずれも指導者である教師が明確な目的を持つて行うことがポイントである。その目的を青木⁽⁶⁾は次のように述べている。

- ①緊張を和らげる。
- ②みんなの名前を覚える。
- ③お互いの理解を深める。
- ④眠気を覚まして集中力を高め、リフレッシュする。
- ⑤グループに分ける。
- ⑥チームワークを高める。
- ⑦視点やメッセージを伝える。
- ⑧本時の授業の展開部にうまくつながるために活用する。

次に学生の感想を数点紹介する。これらから、筆者のねらいや思いが学生に伝わっていることが理解できる。

四

- ・アイスブレイクをやることで授業のはじめの緊張も和らぐことができ、和やかな雰囲気の中で授業を受けることができるのでとてもよい取り組みであると思う。
- ・最初の自己紹介もただ学部と名前を言うのではなく、こういう方法でやると楽しくしかも他の人の名前も覚えやすくなるのでとてもよいと思った。
- ・みんなでお互いに考えながら進めるので、特にこの授業は特別活動のねらいに沿っていて有効であると思う。

- ・グループを作るにしても、ただ機械的にやるよりはみんなで楽しみながら協力し合いながらやる
といいことが分かった。自分が教員になったらぜひやってみたい。

3 理論と実践 現場で即生かすことができる指導力を目指して ～理論編～

授業における「理論」的な内容は講義7回分で行っている。

- ①特別活動の教育課程上の位置付け
- ②学習指導要領の変遷と特別活動
- ③特別活動の目標と基本的性格（特別活動とは何か）
- ④特別活動の内容と指導計画
- ⑤特別活動と生徒指導
- ⑥特別活動の評価と指導要録
- ⑦他の教育活動等との関連

理論編では、特別活動の一番の特徴は「望ましい集団活動を通して」の指導原理であり、このことをまずしっかりと押さえておくことが大前提であることを講義の中で強調した。

そしてこの上で、学級集団を育てていく中での課題や発達の課題及び道德教育の重点などを明確に意識して、意図的・計画的で組織的な指導を行っていく必要があることを示した。

そこで、まず「望ましい集団活動を通して」の指導方法について次のように説明した。学校生活を通して、子どもは子どもの中で日々成長していく。その中でより望ましい集団に育てながら、実践的で体験的な活動を通して、人間関係を構築する力、集団形成の力や社会性などを身に付けていくことができるような「なすことによって学ぶ」という特別活動の特質を強く意識して取り組んでいく必要があること。また、特別活動の中で目指している自発的、自治的な能力を高める意味から、学級会活動などを通して、よりよい生活を築く上で集団としての合意形成を図るための話し合い活動などを充実させる必要があること。さらに、日常の学校生活や学習への適応、健康安全などにかかわる話し合い活動を発達の段階を踏まえてより充実させ、そのことによって子ども一人ひとりに自主的、実践的な態度である自己指導力が身に付くようにする必要があること。⁽⁷⁾

このことをまず正しく理解してもらいたい旨を力説した。

五

そしてさらに、常葉大学の白鳥が実践的研究論文⁽⁸⁾で述べている特別活動の出発点としている内容である。その内容を次に示す。

「まず何よりも大切なことは、特別活動の出発点である。1947年（昭和22年）文部省「学習指導要領・一般編（試案）」における、「自由研究」がそれである。小学校では必修「教科」の一つであり、教科の発展やクラブ活動、当番・学級委員の活動などが行われていたことをおさえている。

また、この最初の学習指導要領が刊行された経緯について、山口・高田（2009）の論考を基に詳述し

ている。^⑨ 一般的な理解としては、アメリカ GHQ の部局である CIE（民間情報教育局）によって文部省へ指示が出され、昭和 21 年 9 月、「文部省の中に学習指導要領を編集するための委員会が設けられ、作業が始められた」ことが直接の契機となっている。ここで重要なことは CIE の指令が出る以前、昭和 21 年 4 月に「文部省内に設けられた「教科課程改正委員会」によって、教科課程の改革のための検討と作業が精力的に進められた」という事実である。「教科課程改正委員会の作業は、当然それに続く学習指導要領作成の作業に引き継がれ、生かされていく」ことになる。昭和 21 年 9 月に始まる CIE との交渉は、「それに先立って日本側で独自に発足し進められてきた作業の成果の上に立って行われたことを確認しておくことは、戦後の教育課程改革が、アメリカによって一方的に押し付けられたものであるという単純な見方を戒める意味でも、極めて大切なことである。」

筆者はこのことを白鳥のこの論文から改めて知り、この内容を受講している学生たちに強く強調している。

また、授業においては毎時間パワーポイントを活用し、穴埋め式の授業資料を作成して授業を進めている。穴埋め箇所は、重要語句などで画面上では赤字でそれを示し、学生にはそれを丁寧に書き込ませている。ここでは何が大事なのかということを知らせると同時に、習得すべき内容を学生にしっかり押さえてもらいたいという意図から行っている。また、授業終盤では、出席を兼ねた本時の課題及び振り返りや授業の感想、教員への質問など記述させている。

筆者はこれらすべてにコメントを書き、次時に返却している。学生にとってこのコメントは筆者とのコミュニケーションツールの一つとなっている。

次に、理論的な内容に関する学生の感想をいくつか紹介する。これらから、筆者のねらいなどが学生に伝わっていることが理解できる。

- ・戦後の教育改革がアメリカの一方的な押し付けでなく日本側で独自に進められた作業の上に成り立っていることに驚いた。
- ・今の教育は授業時間の確保ということで特別活動の授業時間が削減されているが、特別活動は学校を活気づけるのに大切なものである。このことをもっと重く受け止めるべきではないか。
- ・特別活動である学級や学校生活での望ましい集団活動や豊かな体験活動は、道徳的实践の指導をする大切な場であることが理解できた。
- ・生徒指導のねらいである自己指導能力などの育成は、特別活動の目標と重なるところがあり、関係がきわめて深いことがわかった。

六

4 理論と実践 現場で即生かすことができる指導力を目指して ～実践編～

授業においての「実践」的な内容は講義 7 回分で行っている。

- ①学級活動の内容 (1) 演習①「所信表明」
- ②学級活動の内容 (1) 演習②「学習活動案」(学級会)

- ③学級活動の内容 (2)・(3) 演習③「学習活動案」(進路指導)
- ④学級活動の指導 演習④「模擬授業」及び「研究協議」
- ⑤生徒会活動の指導 演習⑤「生徒会活動計画」の作成
- ⑥学校行事の指導 演習⑥「学校行事計画」の作成
- ⑦学校グループワークトレーニング (GWT) の実践 演習⑦

まず、学校現場を想定した「実践」的な部分で、本授業では教員採用が決まり、はじめて学級担任になったことを想定しての「学級開き」でどんなあいさつ(所信表明)をするのかを学生に実演してもらうことから始めた。次に学級会指導(1)「学級や学校の生活づくり」の学習指導案の作成、そして進路指導に関する学習指導案を作成するとともに、その指導案を踏まえた模擬授業を実施した。さらに生徒会活動計画、年間の学校行事計画の作成を行った。そして演習としての最後7回目での授業は学校グループワーク・トレーニング(GWT)をグループで協力し合いながら行い大いに盛り上がりを見せ修了した。

それでは、ここで「学級開き」での所信表明、進路指導に関する指導案作成及び模擬授業と研究協議、学校グループワーク・トレーニングの実践を紹介する。

(1) 演習①「学級開き」での所信表明

この授業の冒頭部分では筆者が教員時代に行った「学級開き」の紹介と愛知県 武豊町立富貴中学校 松久 一道教諭(『THE 教師力シリーズ THE「学級開きネタ集」』明治図書)の「学級開き」の紹介を行った。

【筆者の「学級開き」での一部紹介】

学級への6つのお願い

- ①一年生になったという自覚と共に気分を一新しよう。
(今年の自分と今の自分は違う)
- ②何よりも授業中は真剣勝負の場にしよう。
- ③「やる気」を出そう。
- ④友だちを大切にしよう。
(自分勝手な人、友だちを馬鹿にする人は、いつか同じめに)
- ⑤何でもいいからブツカッテコイ。
- ⑥このクラスに誇りがもてるように頑張ろう。

【松久一道教諭の「学級開き」の一部紹介】⁽¹⁰⁾

パフォーマンス①：変身しよう

- ①教師はサッカーのユニホームの上にスーツを着ておく。
ただし、ところどころ不完全な服装。例えば、ソックスが片方だけ、ユニホームが逆、服装はだらしく、など
- ②生徒保護者の前で、「変身」と叫び、部屋の外へ。

- ③サッカーのユニホームで再登場する。すると、子どもたちは驚いた顔をする。そして、笑いが起きる。
- ④変身しようと思っている人（全員が手を挙げる）。みんな、変身したいと思っているんだね。そう
思っている人が変身しようとするとき、小学校のときあいつはあだったのにとか、過去のこと
をもち出すことなかれ。リセットしよう！新たな挑戦の場だ！急いで変身すると、このように不
完全に変わる。だから、ゆっくり変身しよう。

このことを踏まえて、まず学級担任としてどんな学級づくりを目指すのか、また、どんな学級担任に
なりたいたいか。を学生一人ひとりに考えさせた。その後、4月の学活の時間に、どんな所信表明を子ど
もたちに行うのかを具体的に考えさせ A4 1 枚にまとめさせた。書かせた後は、抽選で 10 名の学生を
選び、他の学生を子ども役にして「所信表明」を実際に行った。

そこで一人の学生が考えた「所信表明」を紹介する。

みなさん、今日から1年〇組の学級担任になりました。〇〇□□です。

みなさん、よろしくお願いします。

みなさんは今、期待と不安と緊張でいっぱいだと思います。実は先生もとても緊張しています。そ
してみんなに会えて嬉しい気持ちでいっぱいです。

先生は静岡で生まれ育ち、小さい頃は絵を描くことが大好きな子どもでした。この頃は将来は絵描
きになろうと思っていましたが、中学校に会った先生の子どもたちを思う前向きな姿勢や厳しく
も優しいところある先生に憧れ、そうだ教師になろうと頑張ってきました。私は夢や希望を抱き努
力すれば必ず実現する思いは叶うと思っています。悪戦苦闘するときもありますが、諦めず粘り強
くやっぺいこうと思っています。

そこで、みなさん一人ひとりをお願いが8つあります。このことをみなさんに心を込めて伝えたい
と思います。

- ①何事も一生懸命やる生徒に！
- ②弱気、内気を吹き飛ばせ！
- ③小っちゃく固まるな！
- ④自分の良さを思いっきりだせ！
- ⑤不満があればはっきり言おう！
- ⑥自分の可能性を怠惰でつぶすな！
- ⑦一年間やり抜くものを持て！
- ⑧自分一人ぐらいは・・・という気持ちをもつな！

いまお伝えしたことは先生も心して精一杯頑張りますので、みなさん、どうかよろしく願ひし
ます。

他の学生もいろいろと思考を凝らして真剣取り組んできた。そして、演習の場面では生徒役の学
生たちも先生役の学生の呼びかけに精一杯応えていて、とてもいい雰囲気の中でとても有意義な時間と

なった。やはり自分の小学校や中学校、高等学校の時の思い出しながら、「所信表明」を自分なりにじっくり考え、それを実際に実演するという体験をすることは正に特別活動の特質である「なすことによって学ぶ」という指導原理を生かした取り組みとなった。

(2) 演習③ 進路指導に関する指導案作成及び模擬授業と研究協議

学級活動 (3) - アでは、神奈川県教育委員会資料「生き方を求めて」⁽¹¹⁾を題材として、将来の職業（働くこと）を通して、自分のよりよい生き方について中学3年生に考えさせる授業を想定し検討させた。

この授業では、「人はなぜ働くのか」ということや「職業選択の優先順位」などを考えさせることをきっかけとして、自分の「職業観」について考えさせ、「職業の三要素」（経済性・個人性・社会性）の「個人性」と「社会性」にポイントを当て、今の自分に何が大切なのか、何が必要なのかを考えさせ、自分のよりよい生き方を求める姿勢をもたせるというものである。

この授業を行うに当たっての前提条件を次のように定めている。

これまでに生徒は、身近な人々に職業インタビューをしたり、その道のプロの方から仕事について教えてもらったりする中で、その仕事の意義や、やりがい、苦勞、そして、その職に就くまでにたどり道りなどを学んでいる。仕事の中には、今、しっかり勉強して、大学に行かなければ、その職業に就けないものや、高校を出てから専門学校で学ぶ方法があるもの、技術を直接教わらないとできないものなど、具体的なことも学習している。

このことを踏まえ、学生は進路指導に関する学習指導案を悪戦苦闘しながらグループ内で相談しながら作成をした。次に学生が作成した学習指導案を紹介する。

第2学年○組 学級活動 (3) 「学業と進路」学習指導案

1 題 材 「生き方を求めて」(3) - (ア)

2 生徒の実態と題材設定の理由

(1)	<p>教師の願いや指導観など 第2学年のこの時期は、学校行事も少なく比較的落ち着いて学習に取り組むときである。そこで、自分の「職業観」を考えることから始め、話し合い学習など他者との意見交換をする中で、自分の将来について長期的な展望で考えられるように支援していき。そして今回の取組のまとめとして、改めて自分自身の目標や生きがいについて考えることや、今の自分にできることなどをじっくり考えさせ、よりよい生き方を選択してほしいという思いで、この題材を設定した。</p>
-----	---

(2)	<p>生徒の実態 第2学年は、これまでに本校近くの商店街での「職業インタビュー」や「職業講話」などに取り組んできた。その中で特に、「職業講話」では、現在第一線で活躍している社会人の方々を講師として招き、仕事の意義や、やりがい、苦勞、そして、その仕事に就くまでの道のりを学んできた。そしてさらに、これからの社会人に求められる資質などを聴くことができた。本学級の生徒も将来の職業についてかなり興味・関心が高く、自分の個性を生かす職業やそのための進路先をどうするか期待と不安を抱いている生徒が多い。</p>
-----	---

5 本時の展開

(1) 本時のねらい

<p>「なぜ人は働くのか」という問いをきっかけにして、話し合いを通して他者の考えを参考にし、自分の「職業観」について考えるとともに、「職業の三要素」を軸にして、今後の自分の生き方を考える。</p>
--

(2) 本時の展開

	活動内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価方法
導入	<p>1 本時の活動の流れについて説明を聞き、テーマを知る。</p> <p>2 「働くことってどんなこと」を記入する。(ワークシート1)</p> <p>3 班で意見交換をして気付いたことをワークシート1に記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 本時の流れを丁寧に説明する。 • 将来の職業を記入することと、これまでの活動を想起し、思いついたものから順番に「働く理由」を3つあげさせる。 • 個人で考える時間を確保し、その後、班での話し合いへと移行する。 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 意見交換を積極的に行い、他者理解をしようとする。(観察・ワークシート)

展 開	4「職業の三要素」とは何かを理解し、先ほどの職業選択の優先順位では、自分がどの要素を重視していたか、振り返り、見直しを図る。	<ul style="list-style-type: none"> • (ワークシート2) を配付 • 三要素のバランスについて気付かせ、改めて自身自身の「職業観」について考えさせ、自己理解へとつながるようにする。 • 意見交換はせずに、自分自身の考えを振り返るようにする。 	【思考・判断・実践】 <ul style="list-style-type: none"> • 学習した内容を生かし、自分の考えを改めて再考することの大切さに気付いている。(ワークシート)
終 末	5「よりよく生きるために」を読み、「あなたの目標やいきがい」「これからの将来に向けて大切なこと」を記入する。(ワークシート2) 6 班の中でお互いに意見交換する。	<ul style="list-style-type: none"> • 「職業の三要素」の中にある「個人性」と「社会性」に関して、今自分にできることを具体的に考えさせ、よりよく生きていくために何が大切かを考えさせる。 • 自分の考え方だけではなく。友達の考えを聞くことで、今後の人生をよりよく生きるために、どんな考えがあるのかを分からせる。 	【関心・意欲・態度】 <ul style="list-style-type: none"> • 友達の考えを聞き、様々な考え方があることを理解し、参考にしながら、自分の今後の取組につなげようとしている。(観察、ワークシート)

学生は自分で作成したこの学習指導案をもとに、グループ毎に模擬授業を行った。その際、グループ全員が先生役を行うこととし、模擬授業自体は導入部分のみとした。先生役以外の学生は生徒役を演じももらった。どのグループも結構盛り上がり展開されていた。

模擬授業後は、グループ毎に司会者、記録者、発表者を決めて研究協議を行った。協議内容は①先生役を行って初めての自評（実際に模擬授業をやった感想）②生徒役から見た発問や指導の受け取り方③特別活動「学級活動（3）」の発問や指導方法の在り方についてである。

次に、研究協議で出された学生の意見（先生役と生徒役）を紹介する。

先生役として

- 生徒に意欲的に授業に取り組んでもらうために、導入の内容は大切であると思った。
- 先生役をやってみて一番感じたことは、生徒の意見を引き出すのがとても難しいということである。
- 発問を3つしたが、それぞれの発問のつながをもっとスムーズに出来れば良かったと感じた。
- 「あの～、え～と～」という言葉がないように気を付けた。先生がもたもたすると生徒が飽きると思ったので、目線を合わせたり生徒に意見を求めたりした。
- 細かく質問を考えた割には、実際に返答が返ってくると次にどう繋げようか迷ってしまった。
- 生徒役の人たちが積極的に意見を言ってくれたので、先生役の自分も笑顔で授業を進めることができた。また、みんなに目線を送るように意識した。

生徒役として

- 先生が自分の経験談を話してくれると、生徒も興味をもちイメージができるので応えやすかった。
- 先生から何を求められているのかがよく分かると応えやすいのだと思った。
- 生徒が言った意見を丁寧にまとめている点がとても素晴らしかった。
- 先生の目が泳いでいると不安そうに見える。職業の話の時に、不安そうにしていると教師になりたい人が減りそう。
- 質問が漠然としていると生徒は何を応えてよいのか分からない。
- 先生役である学生たちが笑顔で語りかけてくれたので、生徒たちも意見がたくさん出て、いい雰囲気での授業であった。

この研究協議で出された意見から、先生役になった学生は如何にしたら導入段階で生徒に本時のねらいに迫るための発問をしたらよいのかを十分に考え実践していたことがうかがえる。また、考えていたことと実践してみてもギャップについても実感したようである。生徒役の学生も先生役の学生に協力しつつも、先生役の学生の発問は分かりやすいか、指導者としての姿勢はどうかなど、細かな点までよく観察していたようである。この模擬授業の中で学生の一人が「早く先生をやりたい」と言っていたことが印象的であった。

(3) 演習⑦「学校グループワーク・トレーニング（GWT）の実践」⁽¹²⁾

特別活動は、集団活動を通して行うことを原則としているので、学校グループワーク・トレーニング（GWT）も授業の中に取り入れて実施している。

このGWTのねらいは「集団に積極的に参加し、責任を分担する協働者を養成することである。

そして、このGWTでは、自らの気づきによって、自ら行動変容をすることを求めている。また、一人ひとりが成長していくとともに、集団も成長していくことを考えている。「個」と「集団」の両者の成長を大切にしている。」ことであると「日本学校グループワーク・トレーニング研究会」では考えている。

内容的には、グループの一人ひとりが持っている情報（情報カードにかかれた内容）を、お互いに伝え合い、それぞれの情報を組み立て、協力し合って課題を達成することを目的としているというものである。

この授業で取り上げたものは数ある GWT の中から「先生ばかりが住んでいるマンション」である。具体的には、1 班 4～5 名（全部で 6 班）のグループで実施した。それぞれのカードに書いてある先生が住んでいる場所を示す情報を組み合わせ、マンションの図に住んでいる先生の名前を記入するというものである。[坂野公信監修 日本学校グループワーク・トレーニング研究会「改訂 学校グループワーク・トレーニング」（図書文化）のものを参考に実施したものである]

「情報カード」の例

1 齋藤先生は、1 階の一番はじに住んでいる。

2 阿部先生は、両どなりには齋藤先生と武田先生が住んでいる。

マンションの図

先生	先生	先生	エレベーター	先生
先生	先生	先生		先生
先生	先生	先生		先生

振り返りシート

1 先生の名前を書いた人は誰ですか	
2 たくさん意見を出した人は誰ですか	
3 いい考えを出した人は誰ですか	
4 みんなの意見をまとめようとしたのは、誰ですか	
5 友だちの意見に賛成したのは誰ですか	
6 「先生ばかりが住んでいるマンション」をして、他に気が付いたことがありますか。	

この「先生だけが住んでいるマンション」のGWT自体は20分で実施した。その後、結果確認を行い、振り返りシートを使い15分で振り返りを行った。この振り返りで学生が気が付いたことをいくつか紹介する。

- 一人ひとりの持っている情報が必要となるので、自ずと協力的になる。
- 誰かが最初に言ってくれるだろうと受け身の状態でいる自分がいることに気が付いた。
- 強いリーダーシップを発揮できる人がグループの中にいるとスムーズに情報を整理することができる。逆に受け身の人ばかりだと中々きびしい状況となる。
- こういう状況はどの世界でもあり得るので、必要な情報を聞き取り整理する能力を高める訓練になる。
- これは生徒だけでなく教員養成など幅広く活用することができる。
- この取り組みは「よりよい集団づくり」に有効である。

おわりに

本稿は、筆者が担当する教職課程科目「特別活動指導法」で、教員志望の学生に実践的指導力を如何に育成するのかを主眼において、「主体的・対話的で深い学び」を視野に入れた授業のあり方についての実践をもとにまとめたものである。

この授業では理論と実践（講義と演習）を踏まえ現場で即生かすことができる指導力を目指して、場面指導や模擬授業などをなるべく多く取り入れた授業を行ってきた。特に筆者が心掛けてきたことは講義の中においても「グループでの話し合い活動」を多く取り入れてきたことである。また、実践（演習）にしてもやらせっぱなしでなく必ず「対話」を意図的に組むことでより深く学ぶことができたことと思われる。ここで「対話」については、立命館大学の荒木⁽¹³⁾は、「単に他者とコミュニケーションをとる、あるいは話し合うという以上の意味がある。それは相手の話を積極的に聴くことが求められるし、積極的に聴くためには、他者に対する承認（あなたが存在することを認めるということ）がまずもって必要となる。また、他者を感じ取ろうとする感受性も必要となる。そして、対話によって私たちは探究活動に入っていくことが可能となり、その結果として、これまで考えたこともなかった新しいアイデアや認識を得ることが可能となる。」と述べている。このことから如何に「対話」が大事であるかがよく理解できる。そしてこの「対話」を通して、深い学びへと到達することが可能となるといえる。この授業では「主体的・対話的で深い学び」を視野に入れた授業を意識して取り組んできたが、受講している学生からも「より学校現場を意識できて良かった」「模擬授業で先生役をやったことでより意識が高まった」など前向きに捉えていることが実感できた。そこで、この試みは、特別活動についての実感を伴った理解と、実践的指導力を育成させる授業への一助となったのではないかと感じている。

課題としては、研究仮説、研究内容、研究方法をもっと綿密に立て、検証可能な理論に裏付けされた実践をもっともっと積む必要があると強く感じている。その意味でまだまだ研究の余地が十分にあるとい

うのが実感である。

今後は筆者自身、機会をみてもっともっと学校現場に訪問させていただき、特別活動の実践を多く学び、科目担当者としての資質向上と教員志望学生の実践的指導力を育成させるための努力を続けていきたい。

参考文献

- (1) 森田健宏 2009「教職教養科目「特別活動」における実践的指導法—「教職実践演習」の導入へ向けた提言」『『夙川学院短期大学 教育実践研究紀要』第2号第3類 46-54
- (2) 中央教育審議会2016「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」平成28年8月28日答申
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf
(2017年11月10日参照)
- (3) 佐藤浩章編 2010『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部
- (4) 伊崎一夫 2011「国語科におけるアクティブ・ラーニングの可能性」梶田叡一責任編集・人間教育研究協議会編『アクティブ・ラーニングとは何か』金子書房 27-28
- (5) 佐々木正昭編著 2014『入門 特別活動～理論と実践で学ぶ学級・ホームルーム担任の仕事～』学事出版
- (6) 青木将幸 2014『アイズブレイク～リラックスと集中を一瞬でつくる～』ほんの森出版
- (7) 杉田洋編著 2009『心を育て、つなぐ特別活動—道徳的实践へのアプローチ』文溪堂
- (8) 白鳥絢也 2016「教職科目「特別活動」において学生に実践的指導力を身に付けさせる試み—アクティブ・ラーニングを意識して—」『学校教育研究』31巻 144-156
- (9) 山口満・高田喜久司 2009「学習指導要領の変遷」日本学校教育学会編『創立20周年記念 資料解説 学校教育の歴史・現状・課題』教育開発研究所 163-184
- (10) 松久一道 2016「自らを大切に磨き、他を思いやる集団へのスタートライン」堀裕嗣編・「THE教師力」編集委員会著『THE教師力シリーズ—THE 学級開きネタ集』明治図書 118
- (11) 神奈川県教育委員会2017『私たちの生活と進路』「9 生き方を求めて」
<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/cnt/f6687/documents/872738.pdf>(2017年11月10日参照)
- (12) 坂野公信監修・日本学校グループワーク・トレーニング研究会著 2016『改訂 学校グループワーク・トレーニング』図書文化
- (13) 荒木寿友 2017『ゼロから学べる道徳科授業づくり』明治図書